【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	佐賀市立思齊小学校
-----	-----------

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	<p>・学力の向上について、授業における書く時間の設定や週末作文など共通の取組により、職員の授業改善への意識が高まった。児童の成果については、十分な達成ができたとは言えず、今年度も引き続き重点的な取組が不可欠である。校内研修や学力向上シートと連携させながら実践の重点ポイントを絞り、職員全員の共通理解・相互交流をさらに深めながら取組を進め、成果につなげたい。</p> <p>・前年度の重点取組の1つであった小中一貫教育は、生徒指導の連携や中学年(5・6・7年生)の接続に重点化した取組を充実させることで一定の成果をあげた。次年度は、「心の教育(教育相談)」「あいさつ等基本的な生活習慣(生徒指導)」「学力向上(校内研修)」を中心に、小中一貫教育の更なる推進を図り、児童・生徒の充実した学びや安心して登校できる支援・環境づくりにつなげたい。</p>
------------------	---

2 学校教育目標	『見賢思齊』の精神で たくましく未来を切り拓く児童の育成 ～小中一貫教育の推進を通して～
----------	--

3 本年度の重点目標	<p>① 学力向上を図る。</p> <p>② 小中連携を推進し、生徒指導・教育相談・校内研修の充実を図る。</p>
------------	---

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価	
	取組内容	成果指標(数値目標)		進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践 ・学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践と書く力の育成	○「書くことが楽しい」「自分の考えを書くことができる」と肯定的に回答する児童が90%以上を目指す。 ○校内研究の教師の意識アンケートを活用する。	・「書く力」を伸ばすための取組(児童自身が「学びの実感」を味わえる手立てをとる) ・「思考・判断・表現力」を高める取組(校内研究との関わりを強化を図る) ・メンターミーティング等で若手育成を図るとともに、学年の連携力を高めることや教師間の授業参観などを通して、教師の授業力向上を目指す。	B	・「書くことが楽しい」「自分の考えを書くことができる」と肯定的に回答する児童が83.9%であったことから、多くの児童が楽しく書いていることが分かる。今後は、児童自身がさらに楽しさや書くことへの自信を実感することができるように、日々手立てを取っていききたい。 ・全国学習状況調査の結果から「書くこと」の正答率が全国より6.1ポイント、「記述式」の正答率が全国より2.7ポイント高い結果となり、これまでの取組の成果が表れたと考える。 ・校内研究のテーマを意識して、授業づくりに取り組んでいるところである。研究授業にも全職員で関わることでさらに意識を高めていきたい。 ・メンターミーティングだけではなく、教員間の授業参観など、授業力向上に向けて風通しのよい環境が整っている。	B	・「書くことが楽しい」と肯定的に回答した児童は82.2%、「自分の考えを書くことができる」と肯定的に回答した児童は89.1%であった。児童は「自分の考えを書くことができる」と実感できているが、楽しさを感じながら書くところまで至っていないと考える。 ・「書く力」を高めるために、意識して授業の中で取り組んでいる教員は91%で、意識して書く取組を仕組んでいることが分かった。 ・校内研究では「思考・判断・表現力」を高める取組(導入部分での手立ての工夫)を行った。職員アンケートによると、すべての教員が肯定的回答であった。 ・メンターミーティングは、やりやすい環境や学年間の情報交換、授業作りの相談など、環境が整っている。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会的、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「安心して学校生活を送っている」と感じる児童を90%以上にする。	・人権集会や人権タイムを実施し、自他の生命を尊重する心や他者への思いやりや心の育成を図り、学校全体に支持的な風土を醸成する。 ・授業参観で、ふれあい道徳授業を実施したり、互いの授業を見合う交流をしたりすることで、道徳の授業の充実を図る。 ・保護者や地域の方と連携した〇〇体験の実施を促す。	A	・人権集会や平和集会、人権タイムを年間を通して計画的に実施し、その都度その内容や振り返りを「人権コーナー」に掲示することで、学校全体の人権意識の高まりを図った。 ・ふれあい道徳については、全クラスいつするかの計画を立て、逐次保護者に授業を公開している。6月のフリー参観では、佐賀県人権・同和教育資料「ジンちゃんケンちゃん」を使った授業を全クラスで行った。	A	・「安心して学校生活を送っている」児童が93.8%と目標値を上回った。人権集会や人権タイムなどを通して、また、活動の内容や振り返りを「人権コーナー」に掲示することで、児童や職員の人権意識の高まりが見られた。 ・計画に従い全クラスでふれあい道徳を実施することができた。「人権タイム」として、道徳の時間に学年グループやクラスで考えたり、話し合ったりする活動を設けたことは、豊かな心を育むことに役立った。 ・地域人材や保護者と連携しながら、児童の体験的な学習を進めることができた。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめの認知、認知に係る組織的対応ができていると回答した教員を90%以上にする。	・日常的な見取りや情報収集により、いじめの早期発見早期対応を行う。学年主任・管理職・SC等との連携を取りながら、組織的に児童の指導・保護者対応にあたる。 ・児童支援協議会を実施し、全職員による対応を協議する。 ・「月の心」「いじめアンケート」等のアンケートを毎月実施することにより、潜在的ないじめに対応する。 ・教育相談週間で全児童と担任が1対1で話す機会をつくる。その後も相談しやすい雰囲気作りをする。 ・Q-Uの分析を取り入れ、児童理解を図る。	A	・児童支援協議会等を通して、毎月の生活目標の取組、生徒指導上で気になる児童や支援が必要な児童について、全職員による共通理解を図りながら指導をすることができた。 ・「月の心」の形式を改善したり、アンケートをもとに個別に聞き取りをししたりすることで、いじめの早期発見・早期対応を行うことができた。担任だけで抱え込まず、学年回や管理職・SC等と連携しながら、児童の支援や保護者対応に当たることができた。 ・8月に、SCによる教育相談研修会を行い、職員の啓発を行った。10月に、教育相談週間を設ける。	A	・「いじめ防止や早期発見に努め、いじめの認知・認知に係る組織的対応を行っている」「日頃から児童とのコミュニケーションを重視し、児童の悩みに直ちに出来る体制をつくっている」に関して、共に、全職員が肯定的回答だった。毎月のアンケートをもとに、その日のうちに対応することを原則とし、管理職や学年内で報告・相談を速やかに進めたり、SC面談につないで対応することができた。 ・不登校傾向の児童に対して、ケース会議を開き、具体的な手立てを講じることで、SSWや保護者とも連携して支援に当たることができた。
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●◎「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童を80%以上にする。 ●◎「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした児童を80%以上にする。	・委員会活動や児童会活動等の様々な場面で児童に出番・役割を与え、承認することにより、児童の自主的・自発的活動を促す。 ・キャリアパスポートを活用し、児童一人ひとりが将来や自分の生き方についての目標をもち、成長を振り返ることができるようにする。	A	・委員会活動を中心として、学校における各種課題を児童の視点から見出し、課題解決を児童自身が話し合い、対策を講じた。 ・「先生は自分のよいところをみとめてくれていると思う。」と回答した児童が93.3%だった。 ・全学年、特別活動や道徳の時間を使ってキャリアパスポートに取り組んだ。「将来やこれからの夢や目標をもっていますか」のアンケートに対して87.2%が肯定的な回答であった。	A	・「先生は自分のよいところをみとめてくれる」に対して、肯定的な回答をした児童は、92.9%で目標値を上回った。 ・「将来の夢や目標を持っている」の質問に、肯定的な回答をした児童は、85.7%であり、目標値を上回った。 ・どちらも中間評価の時より若干割合が少なくなっているが、年間を通して、支援が必要な児童を中心に据えた学級経営や、出番・役割・承認を意識した取組を行ったことにより、着実に児童の自己肯定感が高まってきていると考えられる。
●郷土に誇りを持ち、小・中交流や地域との連携を通してよりよい社会を築こうとする児童の育成	◎「地域を活用し、思齊学に取り組んだ」と回答する教員を80%以上にする。 ◎「小中一貫校であることを意識して教育活動を行った」と回答する教員を80%以上にする。	・カリキュラムマネジメントにより、地域人材の良さを生かした教育活動を、学年の目標に照らし合わせて行う。 ・小中合同ボランティアなどの行事や中期(5・6・7年)での授業研や乗り入れ授業により、児童生徒間、教員間のコミュニケーションを密にする。 ・児童会・生徒会活動の機会を活用し、小中の課題を解決できるように小中合同でできる活動に取り組む。	B	・5年生の農業体験など、教育課程に地域人材を生かして学習活動を行うことができた。また今年も、2、4年生を対象として、地域の方を招いて音楽の学習の手伝いをしてもらう予定である。 ・10月後半に小中合同ボランティアを実施予定である。また、中学部職員による授業を設けたり、学力向上や教育相談などの小中合同協議会を年間行事の中に位置付けたりし、児童、職員ともに、連携は取れている。	A	・「久保田町を誇りに思う」と回答している児童の割合が2回目のアンケートでやや増えた。教育課程の中で、地域のことを知る活動を行ったり、ゲストティーチャーを招くことを積極的に行った成果だと見える。 ・コールさんもせいによるコンサートを計画した。メンバーの方も喜んで来て下さるので、来年度以降も実施できたい。 ・数年ぶりに小中合同ボランティアを実施することができた。ボランティア活動はもろんのこと、小学生と中学生の交流ができたことが大変良かった。職員間の交流も、合同協議会を定期的に行うことで、深まっている。	
●健康・体づくり	●「健康に良い食事をしている」児童を85%以上にする。	・「健康に良い食事をしている」と回答した児童は91%であり、食事の大切さについてを考え、実行している児童が多い。 ・給食メニューを写真付きで児童玄関に掲示した。これまでに食べた給食を写真で目にする事で、給食に関心をもつ児童が増えた。 ・給食献立委員会では、給食献立作成の方針や残食状況衛生面について話をした。	A	・「健康に良い食事を心がけている」と回答した児童は91%であり、食事の大切さについてを考え、実行している児童が多い。 ・給食メニューを写真付きで児童玄関に掲示した。これまでに食べた給食を写真で目にする事で、給食に関心をもつ児童が増えた。 ・給食献立委員会では、給食献立作成の方針や残食状況衛生面について話をした。	A	・「健康に良い食事を心がけている」と回答した児童は93%であり、食事の大切さについてを考え、実行している児童が前回よりも増えている。 ・全国学校給食週間に合わせて、給食がどのように作られているか等の動画を見ることで、給食に関心をもつ児童が増えた。 ・給食献立委員会では、各学期前に給食献立作成の方針や残食状況衛生面について話をした。	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・それぞれの退勤目標時刻から逆算し、放課後の時間を効率的に使う業務にあたることを意識する。 ・「例年通り」を見直し、分掌事務等の内容の変更や削減につなげる。 ・サービス管理システムの運用の準備やICT活用等による業務改善を図る。	B	・今年度校時表が変わり、職員の休休みが確保され、心のゆとりは生まれている。しかし、職員の時間外在校時間平均は、昨年度よりも増加した。超過勤務が続かないように、サービス管理システム等を利用して自己管理をしていきたい。 ・サービス管理システムの研修を行うとともに、滞りなく諸準備ができた。職員は順調に出退勤の打割ができていた。また、i-schoolの校内掲示板を利用して、職員連絡会の時間短縮を図っている。	B	・行事の精選や行事の日程・内容変更が進み、効果的で無理のない行事を計画することができた。 ・サービス管理システムの出退勤打割、休暇等申請は、順調に実施できている。1ヶ月あたりの超過勤務が出るので、帰宅時刻を意識する職員も増えた。しかし、職員アンケートの「在校時間の上限を意識した効果的な業務に努めているか」の項目では肯定的評価が69%と数値が低く、さらなる業務の見直しをし負担軽減を進め、自分の働き方を見つめる必要がある。
●特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○個に応じた支援に係る取組(共通理解、保護者対応、職員研修)ができていると回答した教員を85%以上にする。	・配慮を要する児童に、必要に応じて教育支援会議を行った。巡回相談や専門家チームの派遣を利用したりして、よりよい支援を行う。また、個別の指導計画の作成を100%とし、支援に生かす。 ・夏季休業中に講師を招聘して発達障がい児の支援に関する研修を小中合同で行う。また、特別支援学級の自立活動の授業参観及び授業研究会を行うことで、職員全体の意識を高める。	A	・配慮を要する児童に、適宜支援会議を行った。また、必要に応じて保護者との面談にコーディネーターが入り、適切な学びの場についての助言を行い、関係機関を紹介した。 ・配慮を要する児童について、個別の指導計画の作成は100%できている。計画に基づいて支援を行っており、前期の反省をもとに、後期の目標を新しく設定し、引き続き支援していく。	A	・「個に応じた支援や取組ができている」と全職員が回答している。配慮を要する児童への支援や共通理解、職員研修などに十分取り組むことができた。 ・後期も個別の指導計画を100%作成し、必要な支援を行うことができた。 ・特別支援学級における自立活動の研究授業及び研究会を行い、講師を招いて自立活動についての研修会を設けた。自立活動の視点から有効な支援について学ぶことができた。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組内容		具体的取組	中間評価		最終評価	
	重点取組内容	成果指標(数値目標)		進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果
○生徒指導の充実	○誰にでも「あいさつ・返事」ができる児童の育成	○「児童はあいさつ・返事ができている」と回答した教員、保護者を85%以上にする。	・小中で連携してあいさつ運動に取り組む。 ・生徒指導協議会の協議の柱とし、取組を振り返る場を作る。 ・学校・保護者・地域と連携してあいさつ運動を行う。 ・児童会活動であいさつ強化週間を設け、全校であいさつをし、雰囲気醸成を図る。	B	・小中合同協議会において、あいさつについての共通理解を図った。具体的な取組は今後計画している。 ・生徒指導協議会で、あいさつができるようになるための効果的な指導法を話し合ったり、全校朝会や挨拶を推進するような場を設けた。超過勤務が継続しないように、サービス管理システム等を利用して自己管理をしていきたい。 ・学校では校長や児童、家庭からはPTA会長や交通指導の保護者、地域からは民生委員さんをはじめ企業の方など、三者が連携したあいさつ運動を実施し、今後も継続していく。 ・児童会を中心としたあいさつ運動は今後計画していく。	A	・小中合同協議会において、あいさつについての共通理解を図った。また、3学期には中学部生徒会と小学部開発委員会があいさつ運動の啓発活動を行った。また、2学期終わりに、開発委員会を中心としたあいさつ運動を行った。 ・職員間で挨拶についての共通理解をし、一貫した指導をしたり、全校朝会や挨拶を推進するような場を設けた。そうした結果、児童アンケートでは昨年より「あいさつ」に対して肯定的な回答をした児童が増えた。 ・朝の挨拶運動では、たくさんの方に関わっていただいたことで、児童の自発的な挨拶に繋がった。

5 総合評価・次年度への展望	<p>●…果共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育</p> <p>・「週末作文」も3年目となり、児童の「書くこと」への抵抗は減った。数値目標よりも若干低かったものの、確実に「自分の考えを書くことができる」自信につながっている。今後、確かな学力を身に付けさせるために、さらに校内研修や学力向上シートと連携させて重点内容を絞り、全職員で共通理解して授業で実践を進めていきたい。</p> <p>・小中一貫教育は、中学年(5・6・7年生)の接続と、学力向上のための合同研修を充実させることができた。児童・生徒間交流として取り組んだ小中合同奉仕作業も改善を図ることができた。教育相談や特別支援教育では、合同研修、特別支援学級6年児童の中学校見学と面談、中学校教育相談担当が参加したケース会議など、連携を強化できた。次年度は、小中合同引渡し訓練を計画する。小中一貫教育の更なる推進を図り、充実した学びのほか、安心して登校できる支援・環境づくりにもつなげたい。</p>
----------------	---